

『シンパサイザー』における記憶と「他者」の解放

吉 田 美 津

松 山 大 学
言語文化研究 第38巻第2号（抜刷）
2019年3月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 38 No. 2 March 2019

『シンパサイザー』における記憶と「他者」の解放

吉 田 美 津

1. はじめに —— ヴェトナム系アメリカ人作家が書くスパイ小説

ヴィエト・タン・ウェン (Viet Thanh Nguyen) の『シンパサイザー』(*The Sympathizer*, 2015) は、アメリカ合衆国 (以下、アメリカ) で活動する北ヴェトナムのスパイの視点からヴェトナム戦争を描いたフィクションである。2016年にピューリッツァー賞を受賞したこの小説は、作家のウェン自身が、1975年4歳の時アメリカに逃れてきた難民であり、さらに現在は南カリフォルニア大学でアメリカ研究と民族 (エスニシティ) 研究を教えている教授であることもあり¹⁾、書評の多くは、この小説が名前のないスパイの「告白」であること、そしてまたスパイ小説としての評価にも注目している。たとえば、フィリップ・カプト (Philip Caputo) は『ニューヨーク・タイムズ』誌の書評で、テーマは「西洋と東洋の永遠の思い違いと誤解」であり、それはまた「分裂した心と精神をもつアメリカ化したヴェトナム人」の「二重性」の問題でもあると捉える。この複雑な様相は、小説のスパイがフランス人の宣教師と彼の下女であったヴェトナムの十代の女性の間に生まれた私生児であることから窺える。主人公のアイデンティティの曖昧さは、小説の重要な要素であるとカプトは暗示する。それは、この小説が言葉遊びをするかのように、自分とは特定できない者、つまりスパイであるという語りから始まることから分かる。「私はスパイです。将来の特命に備えた冬眠中の^{スリーパー}諜報員であり、^{スプー}秘密工作員。二つの顔を持つ男。……二つの精神を持つ男でもある」(*The Sympathizer* 1)²⁾

このスパイが記す「告白」は彼が北ヴェトナムの再教育施設で命じられて書

いたものであり、それがこの小説となっている。サラ・ライアル (Sarah Lyall) は『ニューヨーク・タイムズ』誌の書評で、「告白」は「彼が何をして、その背後にある理由は何かを説明する試み」であると言う。「告白」は語り手であるスパイが過去にしたことの記憶をたどる行為であり、東洋と西洋、南ヴェトナムと北ヴェトナム、アメリカとヴェトナムのはざまで、本性を隠してどのように生きてきたかの記憶の書である。それは、スパイの「本性」とは何であるかを、語り手の多面性から浮き彫りにする試みと言ってもいいだろう。パット・ホイ (Pat C. Hoy II) は『スワニー・レビュー』誌の書評で、「小説中の人物ではなくウェン自身の具体的な告白を読んでいるように思えた」(685) と述べて、作家自身がこのような状況を生きてきたのではないかと暗示している。

記憶をたどる「告白」形式のこの小説がスパイ小説でもあることは、アジア系作家であるウェンの特殊な状況を浮き彫りにする。彼はあるインタビューで、「この小説はスパイ小説として、そしてまた文学作品として書かれた」と述べて、刊行当時「ジャンル(筆者: スパイ小説)の含みを持った文学作品」(“On Writing” 212) として出版されたと言う³⁾。その後この小説は、アメリカ探偵作家クラブ賞を受賞している⁴⁾。スパイ小説とは、クリスタル・パリク (Crystal Parikh) も言うように、「従来愛国主義的な白人の男性であるスパイの冒険談」(97) である。しかしながら、アジア系がスパイの場合、アメリカ社会でマイノリティであることもあり、その諜報活動は「情報や権力関係の慣習的なあり方にチャレンジする」ことになり、「国家や宗教、そしてエスニック・コミュニティに対する忠誠の問題」(97) を喚起することとなる。この現象は、アメリカにおいてアジア系が「帰化不能外国人」とされ、歴史的に長く「監視」の対象であったことと無関係でないだろう。ウェンは自らの歴史的社会的出自の特異性に意識的であることが窺える。モニカ・チウ (Monica Chiu) が言うように、「ミステリー、探偵、スパイ、追跡に魅惑されている」アジア系による作品が多く書かれていることを考えるなら、「監視(のテーマ)は人種をめぐる現代社会の不安定な動きに対する文学的な反応である」(4) と考えること

もできるからである⁵⁾。

以上のことを踏まえるなら、ウエンが『ニューオリンズ・レビュー』のインタヴューでスパイ小説を書きたかったということに納得がいく。なぜなら、アジア系の歴史的背景を考えるなら、ウエンが言うように読み物としても面白い「スパイ小説は常に深く政治的で歴史的」であるからだ（“Interview with the New Orleans Review” 9）⁶⁾。したがって、彼が文学形式とスパイ小説の二つのジャンルを駆使する時、相応しい語り口の語り手を作り出すことに苦勞したのは、アメリカの愛国主義者でないスパイでありながら、読者の「シンパシー」を得る人物をつくり上げることが難しかったからであろう。小説の「文章の要となる語り手の声を見つけるのに本当に意識的に努力をした」（“On Writing” 207）とウエンは言う。

ウエンの言うように、『シンパサイザー』は非常に「政治的で歴史的な」作品である。語り手は先に述べたように、南ヴェトナムの秘密警察に入り込んだ北ヴェトナムのスパイであり、父親はカトリックの司祭であり、母親は彼の世話をしていた女性である。彼は父親から愛されたことはなく、母親の親戚には疎まれて育った。物語は、1975年4月、北ヴェトナム軍の戦車が迫るサイゴンを背景に、秘密警察の長官である将軍の一族とともにアメリカに逃れるところから始まる。スパイはそのことを北ヴェトナム軍の上司であるマンに報告し、将軍の動向を報告するという任務をうけて、南ヴェトナム兵である親友のボンと一緒にアメリカに逃れることになる。マンとボンとスパイは幼なじみであり、義兄弟のように強い絆で結ばれているが、ボンはマンと語り手が転向し、共産主義者であることは知らない。アメリカの大学にかつて留学中の時もすでに北ヴェトナムのスパイ要員であったが、当時の指導教授から、大学の事務職の仕事を紹介してもらい、アメリカでの生活が始まる。このようにヴェトナム戦争がヴェトナム人の視点から、それも北ヴェトナム人の視点から描かれる。ウエンは「書くことはアクティヴィズムの形になりうる。私の書物は確かにそのように思える」（“Interview with the New Orleans Review” 3）と述べてい

る。アクティヴィズムとは、社会的・政治的変化をもたらすために意図的な行動をとることである。『シンパサイザー』によってウェンは読者にどのような問題を提起し、どのような行動へと読者を誘っているのだろうか。

2. 傍観者としてのスパイあるいは「読者」

名前のない語り手のスパイの人物造形がこの小説の要となっている。まずこの人物の語りと造形から、ウェンの言う「アクティヴィズム」を促すどのような仕掛けを駆使しているのか考察したい。語り手を特徴づけている要素は二つあり、ひとつは西洋が抱く東洋のステレオタイプへの痛烈な批判をすることと⁷⁾もうひとつは、タイトルの「シンパサイザー」が共産党への同調者と言う意味ばかりでなく、アメリカ文化にも南ヴェトナム人にもシンパシーを感じている北のスパイの「告白」であるということ、そしてこの「告白」は上司であるマンとのやり取りであり、最終的には再教育施設の司令官に読まれるという前提で書かれたものであり、さらに我々読者に供されたものでもある。

まず、アジア人に対するステレオタイプ的な捉え方についての語り手の痛烈な批判は、オリエンタリズム批判である。さらに、それ以上に彼を憤らせるのは、オリエンタリズムの西洋の知の枠組みを作った人びと、つまり他者を表象する力を有する者と彼らによって表象される「オリент」にいる人びと、つまり言葉を奪われ沈黙を強いられ、そして忘却される者との深い断絶である。スパイは党と暗号でやり取りをしているが、その解説書が、ヴェトナム人に対して偏見を持った論を展開しているイギリス人の博士リチャード・ヘッド (Richard Hedd) の『アジアの共産主義と東洋的な破壊の様式』(*Asian Communism and the Oriental Mode of Destruction*) である。リチャードの愛称はディックであり、ディックヘッド (dickhead) は愚か者という意味であることから「痛烈な皮肉」となっている (『シンパサイザー』「あとがき」491)。彼がアメリカ人映画監督に依頼されてフィリピンで撮影するヴェトナム戦争映画の

手助けをしようと決めたのも、ヘッドの次のような記述を見つけたためである。「ヴェトナム人の農民は空爆の使用に反対しないだろう。なぜなら、彼らは政治に関心がなく、彼自身と家族が食べて行けることだけが関心ごとだからである」(186)。ヴェトナムへの偏見を助長する「敵のプロパガンダを打ち壊す」(186)ことを目的としてスパイは仕事を引き受ける。

小説の中盤で語られるこの映画製作にかかわる仕事は、しかしながら、その生産手段と表現手段を握っている監督（the Auteur）と背後のハリウッドの巨大映画産業との勝ち目のない闘いであった。「ハムレット」(村)というタイトルのこの映画は、ヴェトナム戦争映画でよく知られているフランシス・フォード・コッポラ監督の『地獄の黙示録』を彷彿とさせる。その映画のように、「ハムレット」もヴェトナム人を「単なる素材として使いながら、悪い黄色人種から良い黄色人種を救い出す白人男性の英雄叙事詩」(175)として監督は創作しようとしている。ヴェトナム人の登場人物にセリフがなく、叫び声だけなので、すくなくともその叫び声だけでも正しく表現すべきだと異議を唱える語り手に、監督はこの「映画製作自体が戦争に行くことと同じ」であり、「戦争中何をしたのかと孫に訊かれたら、……この偉大な芸術作品を作り上げた」(233)と言えるのだと力説する。これを聞いて、「戦争の本当の意味をつくり上げている三百、四百、いや六百万人もの死者たちよりも彼の芸術作品のほうが重要である」(233)と言っているのだと彼は理解する。ハリウッドは、戦争の「本物の歴史を坑内奥深くに、死者たちとともに埋めて」おき、「世界中の聴衆を痴呆化する」のであるから、「それ自体がホラー映画の怪物」であり、「私を足で踏みつぶした」(175)のであると。力の圧倒的な落差により、ヴェトナム人は「自己を代^リ表^リできない、彼らは代^リ表^リされなければならない」(原文イタリク 233)側なのだ。

監督が仕掛けたふしもある撮影現場の爆発で、スパイは九死に一生を得る。この逸話は、生産手段と表現手段のない者は、自らを代表し表現（リプレゼント）することはできず、自らを歴史の記憶にとどめておくことも叶わず、それ

は死に至ることと同じであるという暗示がある。とすれば、映画製作での屈辱的な体験を記すとは、自らがしたことを記す営みであり、声を奪われたヴェトナム人のエキストラたちを「代表」しようとする努力である。その試みは同時に、「私生児」として社会に認知されないスパイ自身を「表現」しようという欲動に突き動かされた行為でもあるとも言えるだろう。

しかしながら、映画製作での体験はスパイ自身が他のヴェトナム人と同様「自らを表象できない」者であることを深く自覚した体験であった。「二つの精神」をもつスパイは、「私はただ、どんなものでも両面から見るができるだけなのだ」(1)と言う。物事を「両面」から見てしまうことを、スパイは「私生児」(bastard)であるがゆえの特質で、それを欠陥だと理解している。「僕は私生児じゃない。そのために欠陥なんてない。だけどどういうわけか、やはり欠陥を抱えている」(252)のだと考える。彼が物事を両面から見てしまうのは、このように、カトリックの司祭を父とし、ヴェトナム人の女性を母とする出自が大きな要因であると考えている。法的な父親が不在であることは、スパイにとって属すべき国家や家族、そして信じるべき神の存在も不確かなものであるからだ。「私は「自然の子」と呼ばれてもいいし、私の知るすべての国では、非嫡出子と呼んでいる。母は私のことを愛の子と呼んだが、…最終的には父の態度が正しかった。父は私のことを、どんな形にしろ、決して呼ばなかった」(27)からである。父親に拒絶されたことにより彼は、「神よりも共産主義を選んだ無神論者」(34)となったのである。

さらに教会で学んだ「原罪」とは、まさしく自分に具現していることを子ども心に会得する。教会の庭で犬の交尾を見た少年に、「あいつは猫と犬がしたときにできる子どもなんだ」と指をさされて、「犬でも猫でもないもの、人間でも動物でもないものとして、他の子どもたちの目で自分自身を見ていた」(270)という経験がある。彼は自分が他人にとって「人から理解されない突然変異体」(1)であるのだと自覚する。存在するにもかかわらず、認知されない者とはスパイでなくてなんだろうか。上司であるマンから地に潜る「もぐら

(mole)」(227)になる教育を受けて、さらに本当のスパイは「権力の中心に陣取る黒子 (mole)」(228)なのだと説明される。物事の両面を見てしまう語り手の特性は、スパイになるための重要な特性なのだが、それに問題がないわけではない。

北ヴェトナムの再教育施設で睡眠をとらせないという拷問を受けながら、「おまえが忘れたことを思い出せるか」(451)と問われて、スパイは精神の平衡の極限の中で「見ていました」(453)、「私はすべてを見ていました」(454)と叫ぶ。これはマンの密使であるもうひとりの女性スパイが南ヴェトナム警察に拘束され、他のスパイの名を明かせと迫られて、警察官からレイプを受けた事件である。彼は自分の名前を告げられることを怖れて、ただ傍観者のように「見ていただけ」であったということを記憶の奥で認めざるを得なかったことを指している⁸⁾。諜報員としての語り手の仕事は、スパイであることを悟られないように、どこまでも「傍観者」であることを貫くことにあったからである。しかしながら、仲間を裏切ることは「祖国を救う唯一の道は革命家になることだと信じた」(46) ことと矛盾するのではないだろうか。

さらに、スパイであることを隠すために、二人のヴェトナム人を殺害した経緯がある。将軍から内部に二重スパイがいるから特定せよと命じられ、本性を見破られないために「この世にまったく敵のいない男」(120)である「大食漢の少佐」に罪を着せる。親友のボンとともに任務として銃で少佐の額を射貫く。殺人の口実には、「神を、国を、名誉を、イデオロギーを、あるいは同志を守るためだという隠れ蓑」が有効な場合があるが、「私の場合はそうではない」(129) と言うように、少佐の殺害は物事の両面を見てしまう彼自身の優柔不断さゆえの帰結と考えることもできる。だから、スパイにとって少佐の額に射貫かれた弾痕は「第三の目」となって、「私の本性を見抜いて泣いている」(144) ように見えるのである。少佐は「第三の目」をもった幽霊としてスパイに付きまとうのだが、次に殺害するジャーナリスト、ソニーも殺された後幽霊としてスパイに同行する。

ヴェトナムの貴族出身のソン・ドウ、通称ソニーは、スパイと同じ時期にカリフォルニア州のオレンジ・カウンティにある大学の学生となり、そのあと祖国に帰ることなく「ガチガチの左翼」(122)として反戦運動の運動家として活動している。ソニーは將軍の友愛会が共産党政権の転覆のために資金集めをしており、それをタイにいる武装した難民たちの活動に使い、アメリカにいる難民にも誤った希望を植えつけているという主旨の新聞記事を書いた。親友ボンとヴェトナムに帰国したいと考えていたスパイは、交換条件に將軍からソニーの殺害を依頼される。南ヴェトナム軍に対して批判的であり、革命について語り合う点では相通じるところがあるので、スパイは銃を向けながら、「僕は共産主義者だ。君の仲間だ」と言い、「君を助けようとしているんだ」(358)と「仮面」を脱ぎ、正体を露わにする。スパイはこの時こそ「仮面を安全に脱ぐチャンスであり、……自分は理解され、もしかしたら愛されるのではないか」(358)と期待するが、そのような独りよがりを通じるわけではない。「愛ではなく恐怖、嫌悪で、怒りで見つめ返された」(358-359)のである。「仮面」を脱いで、さらけだした自分がさらに不愉快なものであったとしたら、「本性」と「仮面」と考えていたものにどのような違いがあるのか。二日後バンコク行きの飛行機でスパイは幽霊となった少佐とソニーも同乗しているのを見る。幽霊はスパイ自身の妄想であるのだが、幽霊の「第三の目」は常にスパイを監視しており、それはこの「告白」を読む司令官の目でもあり、我々読者の目ともなり、同時に「第三の目」から自身をみるスパイの目とも重なっている。

3. 自己批判の書としての「告白」

少佐とソニーの「第三の目」は、物事の「両面」を見て、「幽霊」のように諜報活動をするスパイ自身をも象徴しているだろう。「第三の目」とは司令官や読者のように見る（読む）だけであり、自ら行動する者ではないということを暗示している。タイに潜入し、国境沿いで北ヴェトナム軍との戦いで死んだ

兵士の亡骸を見て、スパイは「私自身、頭に穴が開いている」(396)と感じる。幽霊となってついてくる少佐とソニーと同様の状態であると感じる。「祖国を救う唯一の道は革命家」であるという信念が揺らぐ。そしてスパイは「私生児」であること、西洋の列強諸国に翻弄されるヴェトナムに生まれたことを恨む。「私はいつでも分裂していた。……二つの人生を生き、二つの精神をもった男になったのは私自身の選択だが、人がいつでも私を私生児と呼んでいたのだから、そうならないのは難しいことだった。私たちの国も呪われ、私生児呼ばわりされ、北と南に分断されていたのだから」(468)と考える。再教育室での拷問の中で彼の悔恨は世界史にまで及ぶ。「アメリカ人が私たちの争いに干渉しなければ、…ソ連が私たちを同志と呼ばなければ、毛沢東も同じことをしようとしなければ、日本人が私たちに黄色人種の優越性を教えなければ、フランス人が私たちを文明化しようとしなければ、…」と続き、最終的には「私が生まれてこなければ」(459-460) このように苦しむことはなかったとスパイは考える。

しかし、スパイが直面している問題は、果たしてそのようなことなのだろうかという疑問が浮かぶ。同志の女性スパイのレイプを傍観し、少佐とソニーを殺害したことは、歴史の必然であったのだろうか。彼がフランス人の司祭とヴェトナム人女性の間に生まれた「私生児」であったことが大きな「欠陥」だったのだろうか。そのために「父の死を願ったこと」(466)が重罪だったのだろうか。いや、そうではないだろう。それらはスパイ自身の状況の説明にすぎないのではないのだろうか。戦争映画の手助けをしたとき、生産手段と表現手段をもった者の圧倒的な力を感じ、彼自身も含めて自分で自らを代表し表象することのできない人びとの沈黙の深さを知ったということがあったのではないだろうか。そのような思いと同志が拷問されてレイプされるのを傍観していたことの間にどのような葛藤があるのか、あるいはないのが問題ではないのだろうか。再教育施設で、この点を問われ、「お前は本当に何もしなかった。これが、お前の認めるべき罪であり、お前が告白すべき罪だ」(438)と言われたこ

とは、同志を裏切ったことを認めさせようとする尋問者の思惑を超えて、物事の「両面」を見る彼に倫理的ディレンマの内実を突きつけることになった。「告白」を書くことが、少佐とソニーの「第三の目」から自身を見るように、スパイ自身に深い内省を促している。

スパイは、再教育施設の人民委員であり、また親友でもあるマンと対面し、彼の変貌に革命がマン自身もスパイも、そして人民も救うものではなかったことを悟る。マンはスパイを肅正しようともくろむ司令官と対峙して義兄弟の親友を救おうとしている。司令官は、スパイが「呪われた人生」(408)を生きており、「私生児であることを癒すには、どちらかの側に加担するしかない」(408)と考える人物である。スパイは司令官にとって「破壊分子のなかで最も危険な人間」(432)である。なぜなら、マンが言うには「お前のような人間は、革命の純粹さを破壊する汚れをもった存在なのだから、浄化されねばならない」(437)と司令官は考えているからだ。司令官のそのような考えが分かるのは、彼がスパイに見せるホルマリン液につけられた「体が一つであるが頭が二つある赤ん坊」(411)である。彼はそれをスパイに「何度か見せた」のであるから、これはスパイ自身に「突然変異体」(1)であることを認識させ、そうではないように回心し、振舞うよう促すためのものだ⁹⁾。だから司令官は「絶対的な正直さは必ずしも評価されない。しかし、だから私はこれをここに保管しているのだ」(410)と言うのである。スパイにとって、それは彼のような者の「欠陥」を示すものではなく、枯れ葉剤という猛毒を製造したアメリカの恐ろしさとともに、大義のために「自己を犠牲にせよ」(414)と革命の大義を説く司令官の非人間性、その二つを如実に示すものであった。

マンが革命の大義を第一に考えなくなったのは、革命を遂行する過程でスパイのような倫理的ディレンマに苦しんだと考えられる。その壮絶さは、爆撃により顔を失ってしまったマンの様相が物語っている。マンの「唇は焼けてなくなり、歯が完璧にむき出しになっている。目は萎れた眼窩から飛び出し、鼻もなくなって鼻孔の穴が開いているだけで、髪も耳もない頭は全体がケロイド

状」(421)である。マンは親友のボンとスパイを救出するためにこの再教育施設にやってきたと言う。二人は革命思想が革命後どのように墮落してゆくかを自覚している。「独立と自由…を名目に自分たちを解放したあとで、私たちは打ち負かした兄弟たちから同じものを奪っている」(487)のだから。この矛盾を理解するからこそ、「二つ精神をもつ男以外の誰が、顔のない男を理解できるだろうか」(486)と彼との深い絆を示唆する。

スパイが本当に直面している問題は、他者に同調すること、「シンパシー」を覚える事は最終的に苦しむ他者を救うことができるのかという倫理的な問題である。マンもそのことを自問しており、スパイに革命家を志したころについて語る。「我々は革命家なのだ。苦しみが我々を作った。我々は自ら選んで、人民のために苦しむことにした。それは、人民の苦しみにとても同シンパサイズ情したからだ」(439)と。他者を思いやることが革命の第一歩なのだとマンは言っているのである。しかしながら、同志のレイプを傍観していたスパイに「お前は本当になにもしなかった」と言ったのはマンであった。スパイは同志を助けず、少佐とソニーを殺害した。その後、スパイは、映画製作現場の事故による負傷で受け取った賠償金の一部を少佐の妻に手渡すといった欺瞞的な「シンパシー」を示すことしかできない。苦しむ他者に同情し共感することが革命への第一歩であるが、それだけでは人を救う力にはならない。この点に関して、ウェンはインタビューで、「語り手は自分を同情者（シンパサイザー）であり、同情心のある人物であると考えている。しかし最後に、このような二つの思いは、政治的に限界のある感情である同情（シンパシー）について理論家が言っているような形で、挫折するのである」(“On Writing” 213)と言う。「告白」はスパイの自己批判の書へと変化している。

このように小説は、「二つの精神」を持つスパイの語りを特徴として始まり、スパイの「告白」を通じ彼の「ハイブリッド」な立ち位置は、有利な視点を確保しているかに思われたが、結果的には物事の「傍観者」とならざるを得ず、具体的な行動においては何もできないということを露呈した。他者への「シン

パシー」をもつスパイのあり様を人間のあり様のひとつと理解するなら、スパイの「告白」は倫理的な問題を提起する。自身のもつ「二面性」について、ウェンは「わたしは一種の二面性を持っていると意識していた。……私が考える二面性とは普遍的なものであり、…少数派のマイノリティであることを定義するのなら、この二面性の感覚は絶え間ない感覚であり、…多数派のマジョリティの一員であれば、いつも居心地がよく、まれにこの二面性の感覚を感じるに過ぎない」と言う（“Interview with the New Orleans Review” 3）。だれもが少数派のマイノリティになる可能性があるとするなら、ウェンの言う「二面性」は「普遍的なもの」である。そう考えるなら、スパイの自己批判的な内省は、スパイであるがゆえの特殊な事情ではなく、我々自身も直面する問題であるだろう。

4. 「告白」から「表現不能な者たち」の「証言」へ

それでは、ある意味で挫折の書としても読めるスパイの「告白」がウェンの言う「アクティヴィズム」をどのように志向しているか考えたい。まず、スパイはヴェトナム人の同国者を含む自分のような存在を代表し、表現することはできるものではないと考えている点である。「二つの精神をもつ男が自分を表^{リプレゼント}現できるなんて、どうして思えたのか。そして、あの頑強に反抗的な同国人たちを含む他の人たちも表^{リプレゼント}現できるなんて。最終的に彼らの代^{リプレゼンタティヴ}表^{リプレゼンタティヴ}がどのように主張したとしても、彼らは絶対に表現不能な者たちなのだ」（483）と。しかしながら、「表現不能な者たち」とは、既存の表現様式では表現できない「他者」のことである。そう考えると、常に認知されずに存在していた「二つの精神をもつ男」の「告白」は、男をスパイとして利用したイデオロギーや革命思想、国家や愛国心といったものの虚構性をあらわにするのではないだろうか。だから、司令官にとってスパイは「最も危険な人間」なのだ。

その虚構性は、スパイの再教育の仕上げとして、ホー・チ・ミンの「独立と自由以外に大切なものはない」の言葉に対して、繰り返し「独立と自由以上に

大切なものは何だ」(467)とマンに問い続けられたことに対するスパイの答えが示している。眠りを奪うという拷問の中で、正気と狂気の間を行きつ戻りつしながら、スパイは、「何もない！」(477)と叫ぶ。「独立と自由以上に大切なものは何もないが、同時に、何もないが独立と自由以上に大切である！」(強調は原文イタリック 486)と。「二つのスローガンはほとんど同じだが、まったく同じではない」(486)。「二つの顔をもつ男か顔のない男でなければ」このような冗談のような「第二のスローガン」を言う者はいない(486)と。スパイの葛藤の帰結は、新たな展開を見せる。ティモシー・オーガスト (Timothy K. August) が言うように、戦争についての公平な見解が得られると考えていた読者は最終的に語り手の「両面から物事を見ることができる能力は不十分である」(74) ことが分かり、「問題なく容易に物事の一方の側を見ることができる」と考えていた語り手と読者双方の欲望」の挫折を露わにするのである (74)。スパイはもはや南ヴェトナムと北ヴェトナム、あるいはヴェトナムとアメリカのはざまでアイデンティティの危機に葛藤し逡巡しているのではない¹⁰⁾ 彼の苦しみは、だれにとつての「独立」であり、「自由」であるのかを考える時、物事の「両面」を見ることがのできる者の倫理的スタンスとは何かを問うているのである。

したがって、スパイは出自や国籍、イデオロギーや「シンパシー」において存在するのではなく、自身のしたことを「告白」する者として、究極的には何をしたか、そして何をしなかったかという行為者として捉えるべきであることが強調されている¹¹⁾ 父親であるカトリックの司祭が「私のことを、どんな形にしろ、決して呼ばなかった」(“He called me nothing at all.” 27) と言うように、彼は父親から認知されない「何もない」(nothing) 者である。唯一、スパイがスパイとして存在するのは「告白」に記された行為を行った者であり、彼が何をしたかはその文章によってのみ知ることができる。スパイはアンハリ・プラブ (Anjali Prabhu) が言うように、「執拗に言葉を操ることにおいてのみ彼が不変の行為遂行体 (performativity) であることを認識する」のである (391)。

特定できないスパイはまさに「告白」という一冊の本によってのみ存在し、そして認知されるだろう。「私は取るに足らない者。私はひとつの嘘で、一人の記録者 (keeper), そして一冊の本にすぎない」(440) と。

小説の最後においてスパイの語り手が「私」ではなく「私たち」を主語にして語りだす点は、映画撮影の現場で、あるいは難民収容所で言葉を奪われ沈黙を強いられている人びとを喚起しようとする試みである。それは、多くの他者と繋がるという形で語り手自身の細胞が増殖してゆくイメージにも重ねられている。「私の細胞は分裂し、また分裂し、さらに分裂して、ついに百万を超える細胞になった。そして私は大群衆…となった」(476)。「私たちは今でも自分たちを革命家であると考えている。最も希望に満ち溢れた生き物だ」(495)と。スパイは彼と同じような体験をした何百万人の人びとに同情し共感を覚えている。医者に「告白」を書き写すように言われて、書き写すうちに「私の人生が目の前で展開してゆく」(482)。それはまさに、読者として自分の人生を読み直す行為である。この「告白」の写しは、同様の体験をした人たちの加筆によりさらなる上書きの写しを生んでゆくだろう。そうすればもはや彼らは「表現不能な者たち」ではなくなるだろう。

その予感は、スパイとボンが再び船で他の難民と一緒に他の国に行くことになる最終場面から窺える。スパイのリュックサックには、リチャード・ヘッドの著作と彼の「告白」の写しが入っている。この原稿こそは、「私たちの——遺言とまでは言えなくとも——証言である。こうした言葉以外、何も人に残してゆくものはない。私たちが表^{リプレゼン}現しようとしたすべての人びとに対抗し、私たち自身を表^{リプレゼン}現しようとした最高の試み」(492) だからだ。小説の最後はまるで小説の初めに戻ったようであるが、スパイはいま彼(ら)の「証言」の写しを携えている。「権力と戦う者たちが権力を得たら何をするのか」という「時間を越えた普遍的な問題」(493)に答えようとスパイたちは再び国をあとにする。

5. 結び——他者を記憶することの倫理

語り手のスパイは無名であり、彼が書いた「告白」は「彼」のではなく「彼ら」の「証言」となり、他の無名の多くの難民とともに再び他の地へ向かうという結末は、この小説が個別の人間の特殊な体験に焦点を当てているのではないということである。小説は「戦争の本当の意味をつくり上げている三百、四百、いや六百万人もの死者たち」(233)、つまり「表現不能な者たち」を記憶に蘇らせ、彼らの存在を呼び起こす場となっている。多くの読者にとって、戦争の犠牲となったヴェトナム人やアメリカにきた難民たちは不幸な「他者」であるだろう。オーガストも言うように、ウェンがスパイ小説を書こうとした意向には、それが読者の抱くヴェトナムやヴェトナム人の「他者性を理解し、それらを位置づける行為に光を当てる」適切な表現方法だと考えたからである (August 73)。

そのような背景には「私たち」と「彼らたち」を区別するイデオロギーがあり、「他者」とはだれであるかをつくり上げてゆく社会装置がある。デイヴィッド・パランボ-リュウ (David Palumbo-Liu) が『他者の解放——グローバル時代の文学研究』(*The Deliverance of Others: Reading in a Global Age*) で述べるように、「私たちに他者を送り込んでくるシステムを通じて他者を見るということの始まりと結果を想像してみると、何が起こるだろうか」(xi) と疑問を投げかけている。文学的営為の多くは、私たちににとっての「他者」をめぐる言説であるといっていいただろう。ウェンの小説は、パランボ-リュウの言うように「文学がいかに他者と我々の関係を想像するためのスペースを生んでいるか、そしてそのような関係がなぜ、そしてどのように歴史的に、政治的に、そしてイデオロギー的に存在しているのかを考えるべきである」(強調は原文イタリック 14) と示唆している。

ウェンはそのようなスペースを作るために、「記憶することの倫理」の重要性を主張している。なぜなら戦争とは戦場だけではなく記憶においても戦わ

れるからである。戦争について何を記憶すべきかについての作業は国家的プロジェクトである。記憶と表象をめぐる戦争論を展開した評論『何も決して死なない——ヴェトナムと戦争の記憶』(*Nothing Ever Dies: Vietnam and the Memory of War*)は、小説『シンパサイザー』の構想の理論的基盤となっている。事実、この評論で戦争について考察しなければ、小説を書くことはできなかったらうとウェンは言う(“On Writing” 206)¹²⁾ ウェンは、評論で次のように述べる。他者について「倫理の最も通常の形における一番の目標は、市民権を認め、国家的儀式において祀り、国家的叙事詩に組み入れ、そして他者と私の間の重大な相違がなくなるまでその人自身を忘れず記憶するという倫理的なこれらの様式に溶け込ませることである」(*Nothing Ever Dies* 69)と、さらに続けて、「この倫理の二つ目の目標は、特にかつて他者として扱われていた人びとは、今まさに他者となりつつある人びとに心を向ける(empathetic)ことである」(69)と言う。

小説においてスパイが船で他の地に向かおうとする時に考えていたのは、他の地で苦しむ人びとのことである。「私たちの生と死は、望まれない者の中でもさらに望まれない者に同情しろといつも教えてきた。このような経験の磁場に引き付けられて、私たちの羅針盤は常に苦しんでいる人びとを指している」(*The Sympathizer* 494)と。『シンパサイザー』は、読者に「他者を思い出せ」、「他者を記憶せよ」、「何を忘却したかを思い出せ」と訴えかける。ウェンの言うアクティヴィズムとは、「他者」に向けるこのような思い(シンパシー)であり、それをどのように具体的な行為として遂行してゆくのか読者に問うているのである。

註

- 1) ウェン自身、大学時代に影響を受けた作家はトニ・モリスン(Toni Morrison)、ラルフ・エリソン(Ralph Ellison)、マキシーン・ホン・キングストン(Maxine Hong Kingston)であり、小説を書くために参考にしたのは、ジョセフ・ヘラー(Joseph Heller)、ルイ＝フェルディナン・セリーヌ(Louis-Ferdinand Céline)、ポルトガル作家アントニオ・ロボ・アンツェネ

- (Antonio Lobo Antunes) であったと言う。(“Interview with the *New Orleans Review*” 8)
- 2) テキストとして *The Sympathizer*, Corsair (2016) を使用した。初版は Grove Press で 2015 年出版である。本文中の引用は Corsair 版からとし、カッコ内に頁数を記す。日本語訳は上岡伸雄訳『シンパサイザー』(早川書房, 二〇一七年)を参照し、必要に応じて変更を加えた。
- 3) 出版社のその意向は、カリフォルニア大学パークレー校の創作クラスでウェンを指導したマキシーン・ホン・キングストンの推薦の言葉がグローブ出版社の初版本カバーに引用されていることから分かる。キングストンは 1976 年『チャイナタウンの女武者』の出版によってアジア系による文学的系譜があることを示した作家であるからだ。しかし、『シンパサイザー』のペーパーバックが出版される時、アメリカ探偵作家クラブ(エドガー)賞の候補となったことから、他の読者マーケットの可能性を見抜き、出版社はプロモーションでスパイ小説の側面を強調したとウェンは言う(“On Writing” 212)。
- 4) 多様な文学ジャンルを駆使している点については、ガーディアン誌のランディ・ボヤゴダ(Randy Boyagoda)が、エリソンの『見えない人間』を彷彿とさせると述べながら、この小説は「スパイ小説、戦争小説、移民小説、思索小説、政治小説、大学キャンパス小説、映画に関する小説、そして他の小説についての小説」として読むことができると言う。
- 5) スパイ小説などポピュラー・ジャンルでチャンネ・リー(Chang-rae Lee)やケリー・サカモト(Kerri Sakamoto)など最近のアジア系の活躍が目されている。これまでアジア系作家が「低俗だとされてきたジャンル・フィクションを書くのは心得違いであるし、無責任でさえあると考えられてきた」(Huang 142)ことが背後にあったことを考えると、スパイ小説をあえて書く作家の志向にはアジア系であることの状況に意識的であり、それが十分に小説のテーマとなりうるとの認識があると考えられる。
- 6) スパイはアメリカの大学で卒業論文『グレーム・グリーン文学における神話とシンボル』(“Myth and Symbol in the Literature of Graham Greene.” 77)を書いている。グリーンは『おとなしいアメリカ人』(*The Quiet American*)でヴェトナムを背景にジャーナリストのイギリス人の視点から諜報員と思われるアメリカ人との関係を描いている。ウェンは、その小説がヴェトナムについての「アングロ文学」のひとつであり、読むと怒りを覚えるが、グリーンのような作家に反応し、そして鼓舞されて書いていると言う(“Interview with the *New Orleans Review*” 5)。
- 7) ウェンはインタビューで「怒り」について尋ねられ、両親の体験した苦労や難民である体験から感じるのではなく、多民族社会であるカリフォルニアにいてアジア系であることの意識が「多くの怒り」の感情を伴うものであると言う。大学進学を契機にその怒りがしだいに形をとりはじめ、最終的に言葉となって具現したのが、この小説であると言う(“Interview with the *New Orleans Review*” 6)。
- 8) 女性スパイの名前は、「苗字はヴェト、親からもらった名前はナム」(456)というように、彼女がヴェトナムそのものを表すとするなら、南ヴェトナムの警官にレイプされるの

を「見ていた」スパイの目に、当時ヴェトナムの惨劇をメディアや新聞で「見ていた」すべての人びとの目と重ねることもできるだろう。

- 9) ウェンは自らについて、「私の前任者がキャリバンだとすれば、もう一人はフランケンシュタインの怪物だろう」と述べて、「西洋によって植民地化されたポストコロニアルな他者の中の一に自分に加える。居場所がなく、異質であり、扱いにくく、ご主人様が言った極上のものにご主人様がした最悪なことを詰め込まれた怪物は、仮面をつけて彼らから注意をそらすか、ご主人様のことばを大仰にひけらかし、自分自身に関心を引きつけないければ、彼の手術跡の縫い目をさらす以外にない」(“Dislocation is My Location” 432) と言い、作中のスパイを彷彿とさせる。
- 10) キムとウェンによると、「ヴェトナムが1960年代の（世界の多くの人びとも含め）アジア系アメリカ人にとってグローバルな革命を象徴しているため、ヴェトナム系アメリカ文学は多文化社会への志向をもつ出版業界を意識しつつ、反共的なヴェトナム系コミュニティも視野に入れた穏やかでリベラルな文学表現に傾倒し、革命や急進的な政治を避けてきた」(Kim and Nguyen, 68) のである。この文章には引用符が付いており、「例外の一つが、南ヴェトナム軍の共産主義者のスパイを語り手としたウェンの小説『シンパサイザー』である」(72) とある。『シンパサイザー』は、アメリカとヴェトナムのはざまでアイデンティティ構築の困難さをテーマとするこれまでのヴェトナム系文学とは異なる新たな文学の系譜を予感させる。「難民ナラティヴ」から始まるヴェトナム系アメリカ文学については拙著『「場所」のアジア系アメリカ文学』の「ヴェトナムからリトル・サイゴンへーヴェトナム系アメリカ人への道」(pp. 131-196) を参照。
- 11) ウェンは作家と作品について、「作家がもし死んでいるなら幽霊がこの文章を書いているか、あるいはこの文章にとり憑いているだろう。幽霊が将来の読者に語りかけるとするなら唯一言葉によってである」(“Dislocation is My Location” 428) と言う。
- 12) 『決して何も死なない』は戦争を記憶することの倫理について、さらに戦争を正当化する言説や映画などの産業構造について、そして戦争をめぐる芸術的表現という三つの異なるテーマで構成されており、完成までに13年かかったと言う(*Nothing Ever Dies* 356)。ウェンはインタビューで、評論で「展開した記憶や表象、そして歴史の問題は必然的に小説という形で『シンパサイザー』に結実していると思う」(“On Writing” 206) と述べている。

* 論考はアジア系アメリカ文学研究会第132回例会（2018年3月10日於：日本大学商学部）での発表「記憶の倫理ーヴィエト・タン・ウェンの『何も決して死なない』(*Nothing Ever Dies*) と戦争の記憶」の一部をもとにしている。

引用・参考文献

- August, Timothy K. "Spies Like Us : A Professor Undercover in the Literary Marketplace." *Lit : Literature Interpretation Theory*, 29.1 (2018) : 60-79. DOI : 10.1080/10436928.2018.1416252.
- Boyagoda, Randy. "The Sympathizer by Viet Thanh Nguyen review—a bold, artful debut." *The Guardian* 12 Mar. 2016. 26 Apr. 2018 <<https://www.theguardian.com/books/2016/mar/12/the-sympathizer-viet-thanh-nguyen-review-debut>>
- Caputo, Philip. Rev. of *The Sympathizer*, by Viet Thanh Nguyen. *New York Times* 2 Apr. 2015. 26 Apr. 2018 <<https://www.nytimes.com/2015/04/05/books/review/the-sympathizer-by-viet-thanh-nguyen.html>>
- Chiu, Monica. *Scrutinized ! : Surveillance in Asian North American Literature*. Honolulu : U of Hawai 'i Press, 2014.
- Huang, Betsy. "Popular Genres and New Media." *The Cambridge Companion to Asian American Literature*. Ed. Crystal Parikh and Daniel Kim. New York : Cambridge UP, 2015. 142-154.
- Hoy, Pat C. II. "Spying with Sympathy and Love." Rev. of *The Sympathizer*, by Viet Thanh Nguyen. *Sewanee Review* 123 (Fall 2015) : 685-690.
- Kim, Daniel Y. and Viet Thanh Nguyen. "The Literature of the Korean and Vietnam War." *The Cambridge Companion to Asian American Literature*. 59-72.
- Lyall, Sarah. "'The Sympathizer,' a Novel About a Soldier, Spy and Film Consultant." Rev. of *The Sympathizer*, by Viet Thanh Nguyen. *New York Times* 27 Aug. 2015. 26 Apr. 2018 <<https://www.nytimes.com/2015/08/28/books/review-the-sympathizer-a-novel-about-a-soldier-spy-and-film-consultant.html>>
- Nguyen, Viet Thanh. "Dislocation is My Location." *PMLA* 133.2 (2018) : 428-436.
- . "Interview with the *New Orleans Review*." Posted on 8 Aug. 2018. 27 Aug. 2018 <<https://vietnguyen.info/tag/new-orleans-review>>
- . *Nothing Ever Dies : Vietnam and the Memory of War*. Cambridge, Massachusetts : Harvard UP, 2016.
- . "On Writing, Radicalism, and Literary Value : An Interview with Viet Thanh Nguyen." *MELUS* 42.3 (Fall 2017) : 201-21.
- . *The Sympathizer*. London : Corsair, 2016. (ヴァリエト・タン・ウェン『シンパサイザー』上岡伸雄訳, 早川書房, 2017年)
- Palumbo-Liu, David. *The Deliverance of Others : Reading Literature in a Global Age*. Durham : Duke UP, 2012.
- Parikh, Crystal. *An Ethics of Betrayal : The Politics of Otherness in Emergent U.S. Literatures and Culture*. New York : Fordham UP, 2009.

Prabhu, Anjali, “The Sympathizer: A Dialectical Reading.” *PMLA* 133. 2 (2018): 388-395.

Sontag, Susan. *Regarding the Pain of Others*. New York: Penguin Books, 2004. (スーザン・ソントグ『他者の苦痛へのまなざし』北條文緒訳, みすず書房, 2016年)

市田隆「スパイ視点で描くベトナム戦争」(読書欄書評)『朝日新聞』2017年11月12日, 12頁。

吉田美津『「場所」のアジア系アメリカ文学 — 太平洋を往還する想像力』晃洋書房, 2017年